

なぜ恥ずかしい下品な言葉は子どもの心を掴むのか
～絵本の世界をとおしての一考察～

1733017 栗原明日香 浅川陽子ゼミ

本研究では、まず子どもの発達とあわせて絵本とは何かを考察した。子どもの発達に関して、「言葉」と「排泄」に焦点を当てると、1歳以降は尿意や便意を自覚し自分からサインを出せるようになり、2歳以降は親しい大人の促しやトイレトレーニングによってトイレで排泄を行えるようになる。4歳以降になると自分の意思を多語文で表せるようになるが、意図的に不適切な言葉や悪い言葉を喜んで使うこともわかった。言葉を身につける過程で、あえて大人の反応をためす時期がある。つまり、「恥ずかしい言葉」かどうかを子どもは大人の反応やコミュニケーションの雰囲気から学んでいると考える。

次に、今までに出版されている恥ずかしい下品な言葉を題材にした絵本を研究した。頭に残る詞や、インパクトのある絵などはその絵本全体を通してとても強く印象に残った。詞と絵とのトータルデザインは子どもたちに絵本の楽しさ、恥ずかしい下品な言葉の面白さを伝える手助けの役割を果たしていると感じた。また、絵本を通して子どもたちは、現実世界では経験できないような人生や物語を疑似体験し、その体験は想像をどこまでも膨らませ、感性を豊かにしてゆく。これが子どもに体験をもたらし、絵本の可能性であると私は考える。最後に幼稚園教育実習の場で、うち関係の絵本の読み聞かせとエプロンシアターを行い、子どもの反応をもとに考察した。絵本を見せたときの子どもの反応から、年中・年長児にはうんちが汚い、面白いという印象があることがわかった。絵本やエプロンシアターでは、「よく噛んでなんでも食べるとバナナうんちが出る。バナナうんちは元気のしるし。」と伝え、その後の給食では好き嫌いをしないでよく

噛んで食べると良いことを子どもたちが理解していると確認できた。このことはまさに「絵本は子どもに体験をもたらし、絵本の可能性」という定義を再確認する研究成果であると考えられた。この研究によって、子どもが恥ずかしい下品な言葉を好むのはなぜかについて、実践例と文献研究から深く考えることができた。自分の身体から出てくる尿や便に対して親近感を持ち、排泄時の保育者や保護者からの「すっきりしたね」などの言葉かけによって良い印象がある。子どもが「うんこ」などと言うと、他の子どもたちは笑ったり、大人は「恥ずかしいからやめなさい」などと言う。これによって子どもは、恥ずかしく下品な言葉は誰かから反応をもらえる、楽しくておもしろい言葉だという認識が生まれるのではないだろうか。つまり、大人と子どもの絵本をとおしてのコミュニケーションのなかで言葉への認識は出来上がってゆくのである。